

金次郎蝦夷紀行

岡田健彦

はじめに

大野藩は、安政三年（一八五六）三月、蝦夷地開拓のための探査を実施した。この時大野藩西方大樟浦の金次郎は、蝦夷地調査隊に水主として選ばれた。同年三月、小浜を出帆し海路にて松前に着船。口蝦夷各地を踏査し、八月二九日敦賀に戻ってくるまでの航海および口蝦夷地紀行を記録した。それが「蝦夷紀行」である（越前大野土井家文書）。本稿では、大野市史編纂室長加藤守男氏のご協力でご覧の機会を得た「蝦夷紀行」の紹介をする。

その後、大野藩は大野丸を建造進水し、北蝦夷樺太開拓の実行に至るのであるが、大野藩西方（西湯）の大樟浦・小樟浦がどのような関わり・役割を果たしたか、また惣督内山隆佐や早川五左衛門など探索隊の行動理解の一助になれば幸いである。

一 当時の幕府の対応と大野藩蝦夷探索

嘉永六年（一八五三）アメリカのペリー艦隊四隻が浦賀に來航した。既に一八世紀も末になると異国船が日本近海に出没する事件が多発、ロシアからも薪水等物資補給の要請があるなど、旧来のままの鎖国政策維持は次第に困難になっていた。

安政元年（一八五四）三月、幕府は日米和親条約を結び、今までの長崎・対馬・薩摩・蝦夷のみを窓口としていた鎖国政策を改め開国に踏み切った。その主な内容は、

- 下田・函館を避難港として開港
- 最恵国待遇の付与
- 領事または駐在の許可
- 薪水・食料等欠乏品の供給
- 漂流民の救助と保護

などであった^②。

ロシアともその年の二月二日、日露親条約を結ぶに至る。二ヶ月後の安政二年（一八五五）二月下旬に幕府は蝦夷地全島のうち旧来の和内地即ち松前城下とその近在を松前藩にのこして、残り全土即ち口蝦夷の一部を除いた北海道全部、南樺太、クリシナ、エトロフ両島を再び幕領直轄地（第二次）に決定した。ロシアの南進および列強国侵入への防止策を講じたのである。そして幕府は蝦夷地開拓の必要性から、安政二年一〇月、諸藩に開拓希望申し出「彼の地へ渡海・開墾・樹芸・牧畜等志願の者の可申出の旨」の触れを出すこととなる。

大野藩は直ちに対応、安政三年一月、推進担当になった内山隆佐^③は、幕府に伺書並びに開墾と金・銀・鉞の試掘の願書を提出する。

同年二月三日、幕府から許可を受け、国元大野の内山七郎右衛門は年寄役・蝦夷地用掛、内山隆佐は年寄役・蝦夷地惣督に任命される。そして蝦夷地実地踏査隊の人選が行われた。大野藩の決断は早く実行敏速であった。時代の流れを的確に受け止める進取の素地が既にでき上がっていたからである。

二 蝦夷開拓の人選と出発

内山惣督の「伺い書案」に人選基準について、藩士からは浅山八郎兵衛（留守居格）・奥田乙右衛門・早川弥五左衛門（西方代官）^④・吉田拙藏・中村岱佐（医師）・鈴木準次等が選ばれ、更に銅山方の

伊藤方右衛門はじめ、「金銀鉛巧者の徒ならびに田畑切り開き漁撈等に手馴れ候領民共」として総勢三〇人ほどが選任された。

次のような記録がある。（越前大野土井家文書）

安政三年辰二月廿一日

一、五番町中屋治右衛門御用召連れ罷出候処

左之通

五番町中屋治右衛門

其方儀、今般蝦夷地御開墾御目論見二付、金銀銅鉄為相見分、彼地江被差遣候、依而自今馬足并二合印被成御免候

但、彼地へ詰中、無格徒士之御取扱被成下候、御用向ハ浅

山八郎兵衛・奥田乙右衛門指図受可申候

中屋治右衛門は金堀師で、金銀銅鉛場の見分・試掘をする役目であった^⑤。身分は「徒士」扱とする、といっている。選ばれた者には、この様な免状が発行されたと思われる。

この中に西方では、大樟浦から金次郎・徳兵衛、小樟浦から又七・市五郎それに佐々生村の枝村である宇田村の勘助が選ばれ計五名であった。

蝦夷地開拓を考えると、大樟・小樟の四人については水主としての採用であったが、実際は漁撈や合物等の水産加工また漁商にも通じたものが庄屋から推薦されたと思われる。宇田村の勘助は黒鍬^{くろくわ}であった。黒鍬とは堤防・道路・石等土木を業とする者の名称であるが、金銀銅などの探索にふさわしい者として選ばれたと考えられる。

東蝦夷地と西蝦夷地の開墾及び金銀鉞の試掘を当面の見分計画と

^②若越郷土研究（福井県郷土誌懇談会）

したが、幕府とのやりとりで委細は現地の函館奉行の指示に従うことになり、三〇名ほどの部隊編成となった。

調査隊は二手に分かれる。陸路江戸径由の一隊は惣督内山隆佐が中心である。もう一隊の西方代官兼海防主任早川弥五左衛門・吉田拙藏等二三名は海路をとって小浜から蝦夷地に向かうこととし、函館で惣督部隊と合流落ち合うこととなった。西方の五名は海路隊であった。

当時西方代官であった早川弥五左衛門は同年（安政三年）二月二五日。織田役所より小浜へ行き、小浜の豪商古河屋嘉太夫の世話で志水（木綿屋）源兵衛の長福丸（二二〇〇石積、船頭長三郎）に蝦夷地までの便船航行を依頼することとなった。長福丸は西蝦夷地余市場所請負人であった竹屋（林彦右衛門）の雇船を兼ね北海道の買積を目的としていた。

志水家は屋号を木綿屋といい、代々源兵衛を称した。⁶江戸後期には小浜町で一番の廻船問屋となり、町年寄をも勤めた家である。島根県浜田湊清水家『諸国御客船帳』には、幕末期長福丸以外に一丸艘の千石船の船主であったことが記録されている。

船頭長三郎は道口浦の住人で、寛政七年（二七九五）武右衛門家の生まれである。下海浦宝来屋の宝力丸（七〇〇石積九人乗り）の乗組員であった。文政九年（一八二六）九月、蝦夷から薩摩へ昆布輸送の途中、長崎沖を過ぎた頃暴風海難に遭い唐国（清国）揚子江河口に漂着、翌年長崎径由で無事生還一〇月帰国をする。のち経歴をかわれて、志水源兵衛に取り立てられ船頭を勤める。晩年隠居して山口武右衛門家三代を二男に継がせ自分は別家し、慶応三年道口

浦の最後の庄屋を務めたという。明治三年、七五歳で没した。末裔は山口論家である。なお、長三郎の二男長七・三男治作は後共に志水源兵衛の長徳丸・長福丸の船頭となる。

大樟浦と道口浦は隣接しており、蝦夷に通じた長三郎の名は十分知れ渡っていた筈で、今回の大野藩蝦夷航路に六一歳の高齢に拘わ

<p>志水氏</p> <p>木綿屋源兵衛様</p> <p>善右衛門様</p> <p>永福丸</p> <p>文政五年五月四日秋田登入津被成候、</p>	<p>同</p> <p>藤次郎様</p> <p>重次郎様</p> <p>長三郎様</p> <p>武右衛門様</p> <p>宗兵衛様</p>	<p>志水氏</p> <p>木綿屋源兵衛様</p> <p>孫兵衛様</p> <p>古福丸</p> <p>天保四巳二月廿二日下入津、扱字買、</p>	<p>同</p> <p>五兵衛様</p> <p>栄徳丸</p> <p>天保九戌七月廿九日若狭登入津、</p>
--	---	---	--

文政十二丑三月廿二日松前登入津、同十三寅三月十五日下入津、扱字御買、其後度々御入津、明治十七申九月廿日松前登入津、

図一 島根県浜田市外ノ浦町清水家 柚木学編『諸国御客船帳』（清文堂、1977）「同」は志水氏木綿屋源兵衛の意である。船名の下に船頭名や重役の名が記載される。長福丸に長三郎の名があり、その左に二男長七「武右衛門」がある。⁷⁾

海難と信仰



円覚寺に奉納されている若狭小浜の木綿屋住吉丸の絵馬

図二 石井謙治『和船一』（法政大学出版局、1995）p389より。
深浦の円覚寺に奉納されている小浜木綿屋住吉丸の嘉永2年（1849）鬻まひの絵馬。
右から3番目に長三郎の名がある。九死に一生の生還への感謝奉納と思われる。

らず船頭長三郎が大樟庄屋から推されたと思われる。
蝦夷への出発に先立ち、内山隆佐は当時蝦夷・北蝦夷の各地を探
検し、当代最も精通していた北方探検家松浦武四郎に次のような信
書を出している。^⑧

当時松浦は幕府から蝦夷西海岸地から北蝦夷地までの「北地調査
幕吏」に起用され、安政三年二月六日に江戸から出立し、三月五日、
箱館に赴任したばかりであった。

一輪拜啓仕候に、今春寒御坐候処、倍御清寧、殊ニ長途之御旅
程も無御滞可被遊御着、重畳恭慶至極奉存候。爾後格別御草臥
も不被為在候哉。御地は定而気候も相緩可申、千万御自玉奉
遙祈候。扱、先達而出府之節ハ、初て得拝謁、其上種々奉懸御
手数安事蒙御懇諭、首庇を以志願成就仕、万々難有謝舞不能尽、
権毫深奉感銘候。右ニ付浅山八郎兵衛、早川弥五左衛門、吉田
拙蔵と申者並下役之者領民十数人引纏在所表より海路直ニ御地
江差下し、私義も為惣督出張被申付候ニ付、奥田乙右衛門、中
村岱佐、鈴木準次と申者并領民共十余人引纏、三月六日発足、
一旦出府之上陸路罷下候ニ付、少々遅延可仕、就而ハ海路罷越
候者共着之上、是非御目通相願且地所見分等之義等も願出可申、
尤江府におゐて場所見分は不苦旨御指図も相済居候に付、私着
已前ニ御座候共先生御助力を以其御筋々江御内密御諷諭被成下
一日も早く開墾開鉦之筋果敢取候様、幾重ニも厚御取計万事可
然御教示被成下候様、奉伏願候。何れ巨細之儀は不遠私罷出奉
拝鳳眉 万相願候義も可有御座此段宜御合置可被成下候。右之
条相願草々奉呈愚楮候。恐惶敬白

内山隆佐

三月四日

良隆6（花押）

松浦竹四郎様

(語句註)

玉研下^{*7}

*1 御身大切に

*5 遠回しにさすとす

*2 お陰様にて

*6 良隆は諱^{いみな}

*3 感謝と嬉しき

*7 硯の御下に

*4 あなたの権勢

箱館への長旅をねぎらい、先の江戸出張の際は初めてお会いでき、種々御教示頂いたお礼を述べ、浅山・早川・吉田等が下役・領民十数人引連れ、在所から海路で御地へ向かうこと。自分は蝦夷惣督として奥田・中村等十余人引き纏め三月六日出発で、江戸經由陸路で行く。海路で行った者には是非会って蝦夷見分について指図をしてやって頂きたい。そして箱館奉行所や関係の所には内密に働きかけを願いたい。開墾開筋宜敷取計らいのお願いの書翰である。手紙の中で、内山隆佐は江戸で初めて松浦に面会をし、蝦夷見分について色々情報を得ていた事が分かる。

「開拓始末概記」に、内山隆佐は安政二年二月二十五日、藩命で大野出立出府し、翌三年一月二〇日、幕府に蝦夷開拓伺書を提出、とある。そして一月晦日江戸を立ち、二月一〇日に帰藩しているから、安政三年正月明けから一月三〇日、この間に江戸で松浦武四郎と面談したのである。隆佐は蝦夷開拓を進めるに際し、松浦武四郎から大きな影響を受けたと思われる。

なお、『松浦武四郎自伝』安政三年四月二日の記録に「松前家来谷梯啓次郎迎えに出る。此処へ大野藩浅山、早川、吉田の三人来る。

向山氏に紹介する」とある。¹⁰「此処」とは金次郎の「蝦夷紀行」から判断すると福島辺である。隆佐に頼まれた通り、会っていたことが分かる。蝦夷探査にあたっての助言を、松浦・箱館奉行所支配組頭勤方向山源太夫から得たのである。

金次郎は、現在の大樟六―六畑広勝家の先祖である。屋号谷屋。福正寺過去帳によると、明治二年(一八六九)二月九日四八歳で死去。蝦夷行に選ばれた時は三五歳であった。畑家の過去帳に第二〇世とある。第一世は「姓は源、河内国八田郷に住す、故に氏とす、真言宗を崇奉し終に剃髪して去容と号す、諸国行脚の途次此大樟浦に來たり、病に罹りて年月を経へる中一子を召し寄せんが病癒えず、天慶五年(九四二)七月二三日死去す」とある。江戸時代は三郎兵衛・奥兵衛・奥左衛門と称し、庄屋等村役の立場にあった。

徳兵衛は安政六年の「大樟浦人別五人組改帳」¹¹に三九歳とあるから当時三六歳であった。そして明治初年の帳簿に新井徳兵衛(廻船商)とあり、昭和初期まであったが現在は家名はなく不詳である。

又七は「明治七年小樟浦戸籍簿」¹²に「四〇番宅戸主浜野又七、船乗渡世二七歳」とあり「父 又七 死亡」とあるから蝦夷探索隊は父であった。屋号は「くらや」と称した。末裔は鯖江に在住。浜野仁史家(屋号又六)と同類という。又六に大野丸と名付けた漁船があったが、このような関わりがあったからと思われる。

市五郎については、慶応三年の「人別五人組改帳小樟浦」¹³に「治郎兵衛俸市五郎四五」とあり、蝦夷行きの時は三四歳であった。治郎兵衛家については不詳である。

時の庄屋は、大樟浦が（向瀬）佐五兵衛（大樟向瀬茂家の先祖）、小樟浦が（湊屋）八右衛門（小樟増田通孝家の先祖）である。

三 「蝦夷紀行」の概要

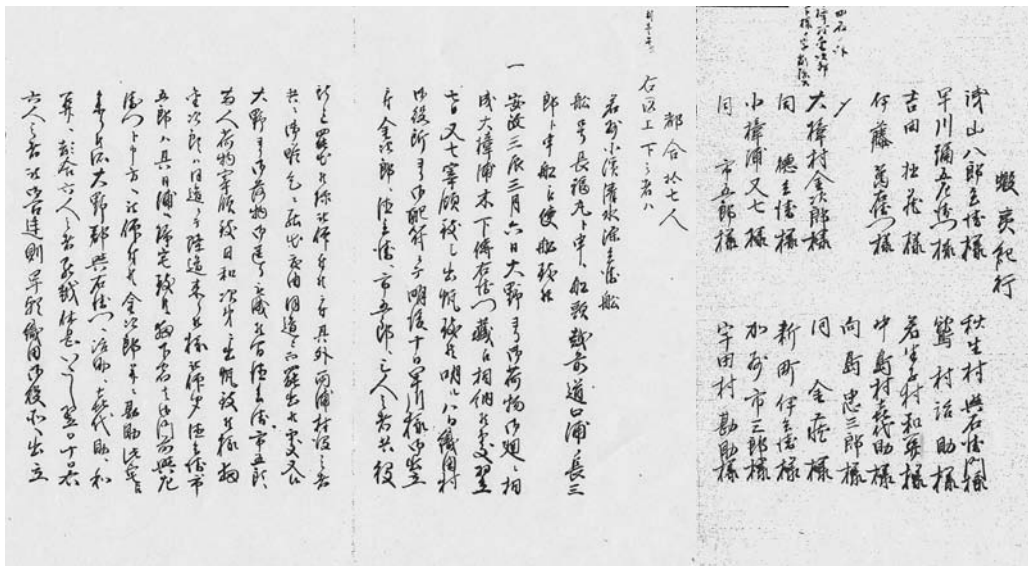
紀行は、金次郎が紀行記録したものを大正六年大津某氏が書き写したとある。そして大正一四年一月に子孫の畑桃三郎から越前大野土井家文書に寄贈されたと思われる。大樟の現在の畑家とは音信がなく、金次郎との続柄は残念ながら不明である。

紀行は日記になっていて安政三年三月六日から記載されている。蝦夷へ海路出帆に際し、三月四日大樟・小樟の四人に藩から庄屋を通じ手間代として計一二両（一人当たり三両）が内貸しされている。蝦夷での活動に要する資材・諸物品は、大野から織田経由で大樟浦に運ばれ、そこから船二艘で小浜へ送られた。当面の日用品・小物類は小浜で調達する。

同三月二日小浜を出帆し、航海中異国船に初めて出会った時の状況、松前大島が見えた時の船中一同の喜びが率直に記録され、そして無事四月一日福山城下に着船した時「神仏の加護」と皆々祝ったとある。また松前城下の想像以上の繁昌に驚いた事が記録されている。

四月四日、函館に移動。アメリカ船や異人上陸に出会い「皆々異人というものは初めて拝見」で珍しきことと感服する。函館弁天町三ツ屋六右衛門方を一行は宿として一〇日余り滞在準備し、四月一日、函館を出て探索活動を開始する。海路隊の早川弥五左衛門

岡田 金次郎蝦夷紀行



「蝦夷紀行」より、越前大野土井家文書（柳迺社御神庫所蔵）

一行は一三日ヤムクシナイ（山越内・現八雲町）に入る。そして内山惣督と落ち合うまでに、手分けしてヤムクシナイを拠点にオシヤマンベ、シッツ（寿都）その他近辺の各地を見分する。当時内陸一帯はカラマツ、カシ、シラカバ、ニレなどの原生林の未開であり、夷人（アイヌ人）・商人の助けをかりながらの探索見分で、時には難所へは食料持参の野宿もする。

口蝦夷各地の要地には、会所や運上屋（交易所）があり、その地域内にまた番所が配置されていた。そこを探索活動の宿泊に利用しており、和人のいない所ではアイヌ人の住居も宿泊としていた。

一方、内山惣督一行は四月二三日着函し、翌二四日夜、宿所三津屋六右衛門方、五月二日に山越内で人家を借りて止宿し、ここで同勢一統初めて面会し、「海（路）陸（路）恙なきを祝し、酒を一統に酌み合う」（隆佐日記）とある。

内山惣督は五月三日ヤムクシナイ場所内のユーラップ（東蝦夷地遊楽部川流域）で合流した探索隊を二隊に分け、惣督は東海岸オシヤマンベからアブタ（虻田）領堺のシツカリ方面、一方の早川隊は西岸フトロ方面で熊石、クドウ、大田方面の踏査となる。

口蝦夷の東蝦夷および西蝦夷の道南地区での行動が記録され、再び函館に戻り、内山隆佐惣督ほか二七名が調査を終え、六月一六日函館を出帆、青森から陸路となる。内山惣督と中村岱佐、伊藤禁之助、山岸伊佐次、藤三郎、久蔵の六人は江戸へ向かい、外は北国道で七月一五日帰国する。

居残った金次郎・徳兵衛・市五郎等は任務を終え、最終的に八月

末海路帰国するが、国元に戻った後も残務のため、越中伏木湊へ出張した記録がある。しかしながら、その間の行程は断片的にしか記載されていない。

あとは、覚えのためと思われる大野藩重役の氏名、函館から東西蝦夷各地への里程その他で構成されている。

金次郎の「蝦夷紀行」は、「何事によらず他言の禁止」が「掟」であったためか、記載内容は極めて簡単で、しかもその日の仕事等の内容や成果、また漁撈等に関したこともほとんど省略されている。水主の立場であったため、金次郎には紀行内容は必要最小限度で十分であったのかも知れない。

大野丸船長の吉田拙蔵記録「北蝦夷地開拓始末大概記」ははじめその他の記録には、早川隊の海路の状況や松前着船からの行程、内山惣督一行が箱館に到着するまでの早川隊の東西蝦夷探索調査が欠落していたが、この「蝦夷紀行」で簡潔ながら明らかにされている。

日々の行程や、外国船・異人・アイヌ人の出会い・大地震や津波の体験と被害状況、松前・函館等の印象記録などあり、金次郎の紀行文は大野藩蝦夷探索を十分埋め合わせになっていて、その理解に意義深いものがある。

おわりに

大野藩は、弘化三年（一八四六）幕府の意向を躰し、四万石の小藩でありながら、福井藩・小浜藩等に先駆けて小樽浦の黒崎台地に

異国船対策の大筒台場を計画し、嘉永二年（一八四九）六月完成させたところである。従って当時の日本を取り巻く列強国の動向認識や異国への国防意識は高かった。鎖国から開国への大きな動乱の時期にあって、藩主土井利忠は時代の動きに敏感であり、蘭学はじめ西洋の知識・技能習得ならびに人材の育成登用を果敢に推し進めた。また、その成果が挙がって有能な家臣が育った。

前西方代官内山隆佐それに当時西方代官であった早川弥五左衛門等は、蝦夷開拓は幕府の北辺の海防に又藩財政の改善対策にも貢献すると、まさに大胆な挑戦に直ぐ決断できた。

口蝦夷探索を終えた内山隆佐は箱館堀織部正鎮台に「蝦地全島は枢要之地」とし、「右、無知貧欲之商売に御任せ被置候ては、利権下に在て、迎も北門の鎖鑰には難相成」と改めて強調している。場所請負人の上納する運上金に依存する面が大きい幕領蝦夷地経営に警鐘を鳴らしている。その上で献策、建言しているが、その思いには松浦武四郎の影響が読み取れるのである。

安政三年（一八五六）西方の大樟・小樟から最初の開拓調査団に参加した金次郎はじめ徳兵衛・又七・市五郎について、又宇田村の勘助についても、その後の足跡について地元での言い伝えや資料が無く、あまり追跡できなかつた。

明治一二年の出稼ぎ関係資料に金次郎の嗣子畑三郎兵衛三八歳が北海道後志国山白町（現、余市町港町）、又徳兵衛の嗣子新井徳兵衛三七歳が後志国江差港へそれぞれ出稼ぎをしている記録がある（木下文書）。単年度の記録のみで、その影響やひろがりは不明であ

るが、このことはそれぞれ親金次郎・徳兵衛の見聞話、勧めにあこがれたものと思う。

実態は、この大野藩にとつて大事業であった蝦夷地開拓探査に大いに下支えがあつて、そして使命感をもつて関わった事が分かった。明治時代になって、大樟や小樟はじめ越前各浦から多数の人が北海道に移住や出稼ぎをした。金次郎等の探索員として見分したことが当時地元で語り継がれて、その影響を受けて出稼ぎや移住をしたに違いない。

大野藩の蝦夷開拓などについては、既に諸先輩から多数解説されている。しかしながら西方から関わった人々についてはあまり語られていない。金次郎「蝦夷紀行」の紹介だけで終わりとせず、当時の蝦夷の状況、時代背景も分かりやすく、と取り掛かったが浅学非才で掘り下げが十分できなかつた。読者諸賢の御叱正を頂ければ望外の光栄である。

なお、大野丸の就航、北蝦夷地の経営に就いては又の機会としたい。最後に真柄甚松先生、加藤守男先生にはご指導を、また松浦武四郎記念館山本命氏からは資料提供とご指導を頂きました。ここに謹んで感謝申し上げます。

註

- (1) 「蝦夷紀行」安政三辰三月吉日金次郎（越前大野土井家文書・柳廼社御神庫所蔵）。表・裏紙含め二〇頁、表紙に「大正十四年一月畑三郎氏ヨリ寄贈」とあり、二頁上欄外に「上四名ノ外大樟村金次郎以下様ノ字削除ス」とある。
- (2) 井上勝生「開国と幕末変革」（講談社、二〇〇九年）。加藤祐三「幕末外

交と開国』(講談社、二〇一二年)。

(3) 『大野市史藩政史料一・二』「北蝦夷地開拓始末大概記」。

(4) 小樽区有文書「小樽浦庄屋歳代記」、『織田町史』(織田町史編集委員会、一九七一年)。

(5) 『福井県史 通史編4』(福井県、一九九六年)。

(6) 『小浜市史 諸家文書編1』(小浜市、一九七九年)。

(7) 仲瀬武雄『郷土史道口』(私家版、一九八一年)、『ふるさと梅浦』ふるさと梅浦編纂委員会、二〇〇八年)、『越前町史上』(越前町史編纂委員会、一九七七年)、『唐山漂流記』(酒井家文庫・小浜市立図書館蔵)。

(8) 「内山隆佐書翰」(松浦武四郎記念館蝦夷屏風左隻所収、解説同館学芸員山本命)。「笹木義友『新版 松浦武四郎自伝』(北海道出版企画センター、二〇一三年)。

向山は向山源太夫で箱館奉行支配組頭勤方^{ごんかた}であった。幕府はロシアの南下への対応のため、改めて蝦夷地・樺太の情報調査に向山隊長以下九名を選んだ。この中に武四郎が安政二年二月末雇い入れられたのである。一行が調査に箱館を出立して間もない四月二日、この日は早川等海路隊が松前に到着した翌日である。なお、松浦武四郎記念館に年不詳の内山隆佐書翰がある。安政三年とも解釈できる。

松浦竹四郎様 内山隆佐

昨日は御光駕被成下不相替失敬之段奉恐縮候、昨夕御約話之通賤^{せんかひ}价差上二付、大略如此二候、恐惶謹言、

正月廿八日

(笹木義友・三浦泰之編『松浦武四郎研究序説』)

また、内山と松浦との交友記録は文久二、三年の内山隆佐日誌、松浦武四郎自伝の文久二年九・一二月にある。

(9) 『福井県史 通史編4』(福井県、一九九六年)。

(10) 笹木義友『新版 松浦武四郎自伝』(北海道出版企画センター、二〇一三年)。

(11) 「未年人別五人組御改帳 安政六年五月日」、「大樽浦戸籍簿 明治七年七月日」木下豊家文書

(12) 「戸籍簿 明治七年八月」、「旧高持名記 明治四年」小樽区有文書

(13) 「慶応三年卯年人別五人組御改帳五月 小樽浦」川上美知家文書

(14) 内山隆佐日記 内山良治家文書(安政七年迄)

内山隆佐日誌 福井大学附属図書館高島文庫蔵

(15) 『福井県史 通史編4』(福井県、一九九六年) 八四七頁。

引用・参考

『北海道の地名(日本歴史地名体系一)』平凡社、二〇〇三年

『福井県の地名(日本歴史地名体系一八)』平凡社、一九八一年

『角川日本地名大辞典一 北海道』角川書店、一九八七年

『角川日本地名大辞典一八 福井県』角川書店、一九八九年

『朝日町誌 通史編』朝日町、二〇〇三年

「北蝦夷地に於ける大野藩人の開拓と国防」吉田森『奥越史料』第三号、一九七二年

「内山隆佐についての文献」(岩治勇一『奥越史料』第三号、一九七二年)

翻刻

「金次郎蝦夷紀行」 越前大野土井家文書

(表紙)

大正十四年一月畑桃三郎氏ヨリ寄贈

安政三辰三月吉日

蝦夷紀行

蝦夷紀行

浅山八郎兵衛様	秋生村與右衛門
早川弥五左衛門様	鷺村 治助
吉田 拙蔵様	若生子村和閑
伊藤萬右衛門様	中島村喜代助
大樟浦金次郎	向島忠三郎
同 徳兵衛	同 金蔵
小樟浦又七	新町伊兵衛
同 市五郎	加州市三郎
都合拾七人	宇田村勘助

右以、上下之者ハ

若州小浜清水源兵衛船

船号長福丸ト申、船頭越前道口浦ノ長三

郎ト申船江便船致候

一安政三辰三月六日¹⁾ 大野ヨリ御荷物御廻ニ相

成、大樟浦木下伝右衛門蔵江相納候処、翌

七日又七宰領致し出帆致候、明ル八日織田村

御役所ヨリ御配符ニテ明後十日早川様御出立

ニ付、金次郎・徳兵衛・市五郎三人之者共役

所迄罷出候様被仰付候ニ付、其外両浦村役之者

共ニ御暇乞ニ罷出度由同道ニ而罷出候処、又候

大野ヨリ御荷物御送り被成候間、徳兵衛・市五郎

兩人荷物宰領致、日和次第ニ出帆致候様、扱

金次郎ハ同道ニテ陸道来り候様被仰聞、徳兵衛・市

五郎ハ其日浦へ帰宅致候、扱下宿者御門前與左

衛門ト申方へ被仰付候、金次郎并ニ勘助此宅^江

參り候所、大野郡與右衛門・治助・喜代助・和

閑都合六人之者罷越休息いたし、翌日十日右

六人之者被御召連、則早朝織田御役所へ出立、

山枯通り糠之浦へ出、同所ニ而船壹艘雇ひ、敦

賀港へ昼八ツ時過入津致、奉書屋重兵衛ト申方へ

止宿、暮六ツ時過ニ大野ヨリ浅山様・吉田様・伊

藤様其外同職之者一同御引纏重兵衛方江御

着ニ相成、十一日朝敦賀出立若州路へ臨ミ、三湯ト

¹⁾若越郷土研究(福井県郷土誌懇談会)

申処ニ此日ハ相泊り、翌十二日若州小浜永井宇之助ト申方ニ止宿、此砌御城下川崎之砂持有之、町中賑々數目を驚かし申候、扱当町清水源兵衛ト申ハ富家ニ而大船も多く持居候由、則此家ニ船頭越前道口浦之住人長三郎ト申者へ此度蝦夷地渡海之御用被仰付、船号長福丸ト申千式百石積之船ニ便船被成候様ニ相極り、三月十二日夕ヨリ^③二十一日朝迄^④風待いたし、渡海之調度相調ひ、二十一日ハ吉日ニも有之候ニ付帆致度候段船頭ヨリ申参り、同日朝五ツ時小浜を出立伝馬船ニテ元船へ乗り移り、白帆ヲ挙テ小浜湊ニ名残り多くぞ立分れて、早くも艇出し大手と唱ふる湊ノ口ヲも暫時ニ乗り越候折柄、小浜の宿の皆々が別れを惜むしるしにや風替りて海上も荒く相成しゆへ、又候湊口ニ立帰るもかなしかりけんと船頭の指図に従ひ、水主等船を丹後の黒地と云ふ山陰に押し廻し、此日ハ爰に碇泊し、翌二十二日ハ昨日よりも風波はげ敷ゆへ今日も此山陰に空しく滞船いたし、廿三日早天ニ船頭か申ニは風筋も少し立直りし故敦賀口江船を廻すべしと指図に応し、伝馬船を巻き揚げ碇を挙て、船を東江差向ケ、扱此日ハ海上荒くして乗組中ニ者少し船気の者も阿り乍去暫時の内に敦賀口

水島前にぞ着にける、碇場を見立て船を掛二十五日朝迄^⑤此水島沖ニ滞船す、扱二十四日朝五ツ時頃水取伝馬船に伴つて海岸ニ上り、田之浦ト申処江此頃中の船の疲れを慰めて、たそがれ前にて船江帰りける、二十五日朝立順風ニも相成り候ニ付水島を出船し、越前浦之御領分大樟浦沖ニ船を留め、伝馬船を下けて浦庄屋佐五兵衛と申方へ一統罷越、御用之義とも夫々調度被仰付夕七ツ時過ニ浦人ニ暇を告げて元船に帰りける、然る処追々南風吹来り真艦ニ白帆を張揚けて能登の出崎を差して艇行せしに、暮六ツ時過ニハ我生国の山々も程遠く隔て、三国湊当り二高山の野火ニ焼なを幽に見返りて、終夜に艇行ハ二十二日朝ハ、早や能登浦も越へけるニや、目にさへきる山とてハ更ニなく廻潮の白く見る斗成、扱五ツ時過ニても有りけん取梶の方に異国の船二艘、三本檣ニ帆を少しさけ^⑥地方を差して艇るを初めて見附、皆々珍らしく事なれハ望遠鏡を取り出し見物なしけるに、順風絶テ吹故と無程帆影も見失ひ、扱艇も行ま、に今日は佐渡ノ島をも越けるよしに船頭が申ける廿七日今日ハ、風も静に相成り明日ヨリは海上も穏ニて船の艇るも速く、此日ヨリ廿九日迄同様の日和にて静に

船を艇らせる、扱二十五日夕越前浦を出て其夕

暮に地方の山を見しまゝにて、夫ヨリ今日迄地方の

山と云ふ物ハ更ニ見ずして遠沖を艇りける、

日の入頃に相成雲間に山の顕われたるを見出

しいづれの山か島かと取くゞり指さし合て申

けるに、船頭も櫓の上迄出熟候して申二ハ、是

ぞ蝦夷松前の大島・家島(小島)と申二ツの内亦定めて

大島なるへし、明日ハ松前福山城下江入津

可相成候得者今夜中ハ船を跡へ可戻と差図有

ければ、船中一同心うれしく其夜者明て、四月朔日朝

小島の東を押し通り昼頃に福山湊江差臨み碇を

卸し艫綱を繋ぎける、越前浦ヨリ此前前迄ハ

海上三百六十里余と申、はるく之海路を少しも

無恙着船しけるも神仏の加護にや有けんと皆

々相祝ひ、先ツ福山城下廻船問屋大津屋武左

衛門方へ、船頭の案内にて皆々船ヨリ上り此家に通

り酒肴等馳走二なり、夫より町役所ヨリ申付有

之下宿へ罷越し、此夜ハ何れも安眠をそなし二

ける

一 四月二日松前城下名所くも荒増見物なし、今

日思ひ之外なる繁昌にてかゝる離れ島にかほと

の珍敷賑はしき土地はあるましくトそんじ
侍りけるに、よくく聞に此土地ニ而松前・箱館・江

差の三ヶ所ハ、諸国の廻船入来り交易盛んなる

事なれハ何一ツ不自由と申事なく、都而都の町

より金銀廻り能く渡世の仕やすき事故に、年

々諸国人之此地江移り住む数知れず候也、扱

此日を四ツ時ニ福山を出立、福島ニ泊り、明ル三日木

古内と云ふ所ニ一泊、明レハ四日箱館江御着被成下、

宿弁天町三ツ屋六右衛門ト申所に町役所ヨリ

申附有之候、然レ共金次郎江御荷物宰領

致、船廻しニ候様被仰付候、市五郎ト申者少

々気分も悪敷候故此者ト兩人城下宿ニ而四日

朝迄止宿致居候、此日ハ南風ニ而宜敷日和ニ相成

候故、此処の泊り川近作と申船頭ニ為積、沖ノ

口改役も相済ミ、此処を昼四ツ時半時ニ出帆、白

髪之場江出、追々南風吹来り此日七ツ時半に箱

館湊(9)に入船仕候、左スレハ陸通り御出被成候御方

々と同時に着仕候、扱此処に十一日朝迄止宿致

居候、此間二者アメリカ船式艘も入船致、異人上陸

致皆々異人と云ふモノハ初而拝見致、誠ニ珍

ら敷事と一統感服仕候、左スレハ十一日箱館

出立致此日者大野泊り、翌十二日鷺ノ木村

泊り、明レハ十三日此日ヤムクシナイ会所迄御出被

成御積り二有之候所、同所二者公儀御役人
泊り二有之候得者、会所ヨリ八丁斗手前

由井村と申所江下宿被仰付此日者同所

○ト申所ニ止宿仕候、明レハ十四日今日山入致度様御申被成候得者、此由井村分半

里斗り海岸行テ、サカヤ川と申所有、此川江者

浅山様・伊藤様其外下七人・上下九人は入候様ニ相極り、此時銘々上下か、わらす白米

三升ツ、持参致、其外味噌・醤油・油等迄持参致、銘

々荷物四五貫目斗も背負て歩行掛候様、道

を迷、右サカヤ川迄山谷二日も隔て此谷々を越へ

候時者、笹藪ニ而鳥も通ふ事不能な檢なる難処

を、顔を見合声掛合ふて越る、漸々川江出、此

川ノ畑ニ而昼の調度致し此所迄壹里計有之、

夫より壹里半斗川上江行、此日者此処ニ野宿

致し、扱サカヤ川の入口分ニ里海岸ニ行てユウラツ

フト申所は、此処にヤムクシナイ支配の番所有、

此処分五六里斗山奥ニ銘山有之由、此処にハ

早川様・吉田様上下八人連ニ而夷人・商人案

内為致、是も米升ツ、上下ニ拘わらす持参致し、

其外味噌・醤油等壹人前四五貫目程宛背負

て参り候処、此処ユウラツフ川と申して中々大キ

ニ深キ川ニして十一里川ト云、壹里斗行候所夫より

水高く奥江は入候事不叶、此日者此所ニ野宿

致し是又難所ノ所也、扱夫ヨリ両所共翌日山

分出、クン又イと申所有、此処迄ハ、ヤムクシナイ運ヒ

屋分道須七里有り、十五日夕方迄に此処夷人小屋ニ軒

有夷人ノ名シカサト申小屋に両所同勢行合、此所

ニ皆々一宿致候事也、扱其夜之御相談ニハ昨日

者早川様・又七・勘助・與右衛門・伊兵衛都合五人

西部見分ニ相極り、明レハ十六日式里半行てオシヤマ

ンへ江出、山越ニシツ、江出る也、扱吉田様市五郎

壹人被召レフシケと申所迄海岸御見分ニ御出

被成候、浅野様^⑩・伊藤様以下八人蝦夷人壹人

案内為致、上下拾壹人上下ニ拘わらす米三升

五合ツ、持参致し其外味噌・醤油等持参致、此日

昼遣致所迄ハ金次郎・徳兵衛・金蔵三人之

者は迄送る約定ニ而、五里斗川上山奥見送

り其夜を右カフオ宅^江歸り、十八日迄止宿致候也、

扱十八日伊藤様其外右連名之者同道ニ而ユウラツフ

番屋迄歸り、其日七ツ時過ニ右クンヌイ山奥^江

は入シ、連中此日同所ニ同宿相成候、明レハ十九日

一統ヤムクシナイ運上屋方ニ止宿致候也

一吉田様へ箱館御出ニ付、何々荷物入用ニ有之候

間宰領致各々様下拙^江被仰付、四月廿一日

ヤムクシナイヲ出此日鷺ノ木泊り、廿二日大野泊り、廿三日^⑩

箱館三ツ六方へ着致、翌日廿四日荷物取調へニ付

休息致候也、明レハ廿五日此所出立ノ積り有之候

処、其夕土井様之御渡りと申越二付、廿四日夜
四ツ時二三ッ屋六右衛門方へ御着之御方々左ノ
通り

内山隆佐様 奥田乙右衛門様

中村岱輔様 鈴木順次郎様

浅山禁八様 伊藤禁之輔様

山岸伊三次様 多田作右衛門様

以下

藤三郎 久藏

忠兵衛 彦吉

政右衛門

上下拾耆人

一 四月二十七日奥田様・治右衛門様・家来三人・拙者

同道ニ而ヤムクシナイ江着ニける、

箱館出立廿七日、廿九日此所ニ着

一 四月晦日箱館出立、

内山様其外様五月二日ヤムクシナイニ御着ニ相成、扱

爰に西部江御越相成候所、早川様四月二十九

日箱館江御着ニ相成、是又御同道ニ而ヤムクシナ

イ江御着ニ相成候也、扱又此所今早川様西部江

御出ニ付、拙者・又七・與右衛門・治助・市三郎・治右衛

門様・彦吉被召都合八人五月四日此所出立、其日

鷺ノ木泊り、翌日五日大野、六日木古内泊り、七日江刺

泊り、八日乙部泊り、九日熊石泊り、十日クドラ番屋泊り、十二日

大田江着、十二日昼過山見分致、十三日此所ニ逗留、翌

日十四日此所分船ニ越へ此日熊石泊り、十五日江刺泊り、十

四日木古内泊り、十七日箱館着

一 五月晦日、夜南大雨風ニ而暮六ッ時分明ケ七ッ時迄

一 オクリカンキリ奥田様分薬種取方へ行間合候様

被仰聞候ニ付、箱館五十嵐方へ参り当年ハ目方壱

両ニ付七百文位、通例五百文位、扱オクリカンキリト申

ハサルガニノ頭ニ有玉也

一 内山様其外上下廿七人六月十六日四ッ半時伝馬船

江御乗被遊過様出帆ニ相成候、丑ノ方風ニ而宜敷

日和ニ相成候、翌日十七日も宜敷日和ニ有之、此日青

森江着船ニ相成弥ト存候也

一 アメリカ船

一 イキリス船

一 蒸気船

メ四艘入船致居候所

Sescyata okuyugi

Kingiroo

dumand in lysloop

Tur beyulipi

金次郎・徳兵衛・市五郎

メ三人宿三津屋六右衛門旅籠

六月十六日夕

徳兵衛・市五郎、場所行

十八日昼迄 六賄ッ、

七月十五日夕分

サカラ合来り

兩人

此間ヨリ

一異国船四艘、内吉艘蒸気船

箱館湊へ入船致居候処六月十七日朝四ツ時

式艘出帆致し、跡式艘も追々出帆

一六月廿七日、昼六右衛門青森より来り

一六月廿八日、古手箇納屋敷へ預ケ

一七月二日、朝四ツ時九ツ時迄大雨、三日曉七ツ時

迄大雨、三日山嵐大吹

一七月廿三日九ツ時迄大地震津波二而、内間浜¹³・川・外潟

大いたミ夫合月中毎日少々宛ある也

一八月十一日夕徳兵衛・市五郎箱館出帆十二日夕迄東

風、十三日朝合今夜中大南風、十三日夕五ツ時合八ツ時迄

大雨雷鳴スル也、十四日朝合ヒカタニ¹⁶而天気宜敷候

一同月十五日夜九ツ時出帆、十六日夕方迄二城下弁天より

二三里上り、十七日朝五ツ時二吉岡立戻ス、翌十八日

此所ニ対船ス、翌日十九日此所出帆此日東風二而大

島辺迄上り、廿三日合北風二而、廿四日七ツ時能州福浦

江入船いたし、翌日廿五日、六日、七日此所ニ滞船ス、廿八日朝

出帆

廿九日昼過敦賀へ着船ス、卅日高佐船ニ着渡致ス、

加州本吉菅波屋清助方

越中伏木浦¹⁸十月二日夕入船到ニ付、御荷物支配ニ参り

十月八日出立、此夕森田泊り、九日小松浦行、十日金津泊り、

上り十九日朝伊藤様然し市五郎伏木へ出立ス

小杉村奉行

伏木肝入 彦七、源右衛門

昆布買手 和田屋吉吉

若杉屋善兵衛 板本八兵衛

伏木宿 氷見屋利右衛門と申

土井能登守様御家中 御役附

御家老

小林元右衛門様 大生仁右衛門様

御目附

奥田乙右衛門様 石川順次郎様

岡田求様 宮崎八郎治様

御年寄

堀三郎左衛門様 内山七郎右衛門様

内山隆佐様

御用人

平岡伊織様 岡嶋彦左衛門様

田村斗之輔様

御番頭

岡源太夫様 田村勝馬様

岡與三右衛門様

御取次

小林貢様 中村志馬様

三宅亘様

御留守側

牛島平馬様

御物頭

岡 重郎輔様 横田権之進様

浅山八郎兵衛様

六月十四日

一壺ノ百文 ナタ二丁 全

一七百五拾文 カマ三丁同人

一蠟燭壺箱 全

皆掛 式ノ百九拾匁

内式百九拾匁 風袋行

正ミ

壹ノ九百匁 目方百匁二付五拾匁ツ、

代三ノ八百文

箱館ヤムクシナイ会所迄五里

大野村四里 宿野辺四里半 鷺木村迄三里四丁

落下電村式里半 会所迄

本吉尾山屋九月二十三、四日津軽十三里浜へ命

助り

一名くわん丸在船頭親子放生津まき屋

厩

箱館今三里 有川村江半里 三ツ谷村一里半 茂辺地迄一里

当別村一里半 釜屋村迄壹里 泉津村二里 札苅村一里

木古内村

是ヨリ山越 五リ行テ番所有二里 湯絶迄二里

其松部一里半 北村一里半 五勝手迄半里 江差迄三里

乙部村 小茂内村 突府村 三ツ谷村

蚊柱村 桐沼内村 泊り川村 熊石村

ノ

右大正六年九月十四日畑金次郎分贍写ス大津印

註 「大野市史藩政資料二」から引用の「北蝦夷開拓始末大概記」は「開拓始

末記」、「安政三年蝦夷地行諸品買上勘定帳」及び「西方五人之者給金雜

用勘定帳」は共に、「勘定帳」と略記した。また、「紀行」の文中に括弧（）

で補足をした。

(1) 安政三年三月四日 金一二両 大樽浦庄屋佐五兵衛 小樽浦庄屋八右衛

門印渡 右は、この度蝦夷地へ召連れ候水主四人手間代内貸相渡「勘定帳」

(2) 三月九日 金一両三分 大樽浦庄屋佐五兵衛渡、右は大樽浦より若州小

浜へ船二艘荷物積入送り代「勘定帳」

三月九日 惣督及び奥田・鈴木・中村ノ一隊ハ江戸へ出、浅山・早川・吉田等ノ一組ハ小浜ヨリ乗船、北海航渡函館ニテ出会ヲ約シ南北二分ル「開拓始末記」

【説明】藩政時代大野から小樟・大樟への交通路は通常大野、大宮、大窪（大久保）、東郷、浅水、吉江、織田、小樟、大樟の順路であった。信書や物資もこのルートが使われた。また敦賀への陸路は浅水から鯖江、府中、二ツ屋、木の芽峠、新保、敦賀であった。

(3) 三月一三日 金一分 小樟浦又七渡 右、船積荷物小浜まで送り越候節、風波荒し逗留に付、与内（割増分）として相渡「勘定帳」

(4) 同一八日 銀四匁 水主市五郎・徳兵衛兩人初日別宿致し候に付泊代。

二〇日 金二匁 船頭長三郎え酒代 同三匁 水主一三人の者え右同断。

右は小浜より松前城下迄便船相頼み候に付、同所志水源兵衛船頭長三郎並びに水主一三名の者へ御酒代

二〇日 金二分永三六文九分 志水源兵衛并船中え出船祝儀として酒肴買調遣わす。(一八日、二〇日共に勘定帳)

(5) 同二五日 金一分 大樟浦佐五兵衛下され、右は浦方前において碇降ろし候節同勢一統上陸休息させ候に付、茶代として相渡。「勘定帳」

(6) 【説明】地方とは陸地の方角の意。江戸時代も後期になると沖乗りや夜間航行が行われ、航海日数の短縮化が計られた。今回の場合は、能登船倉島沖から松前沖大島までは沖乗りで夜間航行であった事が分かる。風に乗る早い時は四〜五日で達した。

(7) 四月初日、松前に着船 金一匁一分 内式百疋 船頭長三郎へ下さる。三百疋水主一三人へ下さる。右は海上滞りなく松前へ着岸ニ付、祝儀として船頭・水主へお酒代相渡す。「勘定帳」

是ヨリ陸路二宿ヲ経函館ニ達ス「開拓始末記」

(8) 四月四日 ①金二朱永四一文六分七厘わさび買入れ代、右は志水源兵衛え小浜着の節、差し遣わし候代銀相渡す。

②金二匁二分二朱、内金二匁外に三匁相渡し置き都合五匁小樟浦又七、一分外に一匁二分相渡し置き都合二匁三分宇田村勘助、二朱外に三匁相渡し三匁二朱大樟浦徳兵衛、右は給金の内前依頼相渡し。「勘定帳」

【説明】松前藩には稲作地はなく、無高であった。藩士には知行地のかわりにアイヌとの交易場である「場所」（商い場）というものを与えた。一六〜一七世紀から本土の商業資本が進出し、アイヌへの仕込み資金貸し付けを通じ、やがて「場所」を商人が請負するようになった。漁民が年貢として納める鯨や昆布を交易品として藩財政をまかなった。「場所」は一つの広さが本土一郡、ときに一國ほどあり、数は八五カ所であったという。

大商人の資本は松前に集中し北前船の出入は多く賑わい、江差・函館はその半分に満たなかった。また松前は京や若狭との縁が深く、城下町の伝統と漁民の労働とで支えられていた（司馬遼太郎『北海道の諸道』朝日新聞出版、二〇〇八年）。

(9) 当時の函館戸数は約千戸・人口四、〇〇〇人であった。遊歩地は日米和親条約付録で周囲七里と決められた。嘉永七年（一八五四）ペリー艦隊再来、ペリー五月下旬函館見分の際の印象は、漆の全景が視界に広がり、その安全性と広さそして出入港のしやすさに、ここがすばらしい锚地であることに驚嘆している。幕府直轄地の松前との間にかんりの物資往来がある。幕府の役人は函館は貧しいと強調するが、この地の将来性は高い、と記録している（加藤祐三『幕末外交と開国』講談社、二〇一二年）。

【参考】安政四年（一八五七）春、再度大野藩早川弥五・中村・浅山外二〇人北陸道を通り蝦夷へ見分に行、その折浅山八郎一家「ヤムクシナイ」在住することになる。文久元年（一八六一）浅山八郎は帰藩するも、その子、太八郎其外今以て彼の地に在住す、とある「開拓始末記」。

岡田 金次郎蝦夷紀行

- (10) 廿三日江戸巡り惣督以下一同着函「開拓始末記」。
- (11) 実地検査処々組を分け探討ヲ窮メントスルモ、諸山雪深ク川々水長漲リ陸地ハ篠竹生茂リ、跋涉意ノ如クナラザルヲ以テ、惣督ハ一ト先帰函(五月二五日)。
- 吉田拙等ハ猶探索ヲ要シ、山越内ヨリオシヤマン等へ抵リ、是ヨリ黒松、内越、シマコマキより寿都、ヲタヌツ、磯谷ヨリ雷電(岩内町) 山越岩内以北マテ探討シ帰函「開拓始末記」。
- (12) オクリカンキリ(カニの目の意) ザルガニ類の胃石。蘭方で一種の利尿劑とされた「岩波広辞苑」。葉の目方、一両は四匁で一五グラム。
- (13) 一ト先一同帰邑の事ニ決シ、両三徒相殘シ六月十五日函館発青森へ着船ス「開拓始末記」。
- (14) 山から吹いてくる風。
- (15) 内淵は現在の函館市末広町なり、函館市の中央に位置する。
- (16) ヒカタ とは「日方」、申西(西南西) の方の夕日の空より吹くを、船人の語に日方のよひよわりといひて晩に其の方より吹くは強き物ながら、暮れ過ぎるほどにはかならずよはる也。この風は越前の外にても日方といひ、蝦夷でも云う(越前国名蹟考)。現在でも使われていて解釈は同じである。
- (17) 金一分 大樽浦 金次郎渡 八月一五日函館出帆、同二九日敦賀着船に付、日数一五日雑用相渡、但二日銀一匁つ、「勘定帳」
- (18) 金七兩二分 大樽浦金次郎渡 三月より八月迄給金、但一ヶ月金一兩一分つ、。
- 金一兩銀一〇匁 大樽浦金次郎渡 九月二八日出立大野え召し出し候節、日数五日、一〇月八日出立越中伏木浦え罷越、同晦日帰村日数二三日、都合日数二八日分手間代、但一日銀二匁五分づ、
- 金一分銀四匁三分 右同断 敦賀着船の節一日逗留二付一泊、越中行き往來七泊代、八泊旅籠一泊二付二五〇文づつ。



図 北海道要図

注)『角川日本地名大辞典 北海道』を参考にした。
 『県史通史4』より引用 (P850)

銀七匁八分 右同断 敦賀帰り一昼飯、越中行往來九昼飯、都合一〇昼飯代相渡、但一昼飯二付七五文づつ。「勘定帳」